中日理論言語学 国際フォーラム 2013
2013 年 7 月 14 日 同志社大学

言語地理学とは何か

大西拓一郎
takonish@ninjal.ac.jp
国立国語研究所 時空間変異研究系

1. はじめに

本発表では言語地理学がどのような学術分野であるのか，現状を踏まえた上で将来を見据えて展望する。まず，言語地理学の(1)位置付け(2)学術性(3)目的の 3 点を検討する。次にこれらをもとに言語地理学が言語研究ならびに人文学一般に何をもたらすのかを考え，その特質を明らかにする。言語地理学は言語研究の中でもとりわけ学際性を強く帯びた学術分野であり，人文学全般と有機的に繋がりえる可能性を持つ。それを実現するためには目的や対象を絞りすぎないことが肝要であることを述べる。

2. 言語地理学の位置

2.1 言語地理学，地理言語学，方言地理学，地理方言学…という学問

今回のシンポジウムでは「地理方言学」を展望することがテーマになっている。「地理方言学」というのは聞き慣れない用語である。指し示したいことは理解できるものの，「地理方言学」はそれを専門とする我々の間でもほとんど使われることはなかったはずだ。

方言の分布を扱う研究分野は，「言語地理学」と呼ばれることが多い。そのほかにも「地理言語学」「方言地理学」そして今回の「地理方言学」など，いろいろな名前が与えられてきた。それぞれに違いがあるかというと，若干のニュアンスの異なりを除けば，実態は，ほぼ同じものである。そのニュアンスの違いというのは，言語学であることを主張したい場合には「言語学」を複合名詞の後部要素に置き（つまり，地理言語学 : geolinguistics），そのようなことにあまりこだわらないのであれば，通用している言語地理学（linguistic geography）を使うという程度のことに過ぎない（と大西は理解している）。このニュアンスをめぐる立場の違いが時として多少の軋轢を生むことがあるにせよ，大局的に見た場合，大きな違いはないはずだ [1]。

以下では，名称にはこだわらず，方言の分布を対象とする学術分野を広く「言語地理学」として進める。

2.2 言語地理学と隣接科学の関係

(1)言語地理学と方言学

同一系統内の言語の変異が方言（dialect）である。変異の決め手は，地理空間という場所のほか，階層・職業・性といった社会的属性など多様である。そのような方言を研究するのが方言学（dialectology）である。決め手の中でどれがもっとも一般性を有するのかは，言語間で異なりがある。このことで各言語の方言ならびに方言学が与えるイメージに

[1] geolinguistics という用語は，信州大学人文学部の澤木幹栄氏によると 1990 年にドイツ Bamberg 大学で開催された SIDG （international society of dialectology and geolinguistics）の会合において Wolfgang Viereck により提唱されたらしい。

違いが生ずる。日本語においては(おそらく中国語(漢語)ほかアジア諸言語においても),場所による異なりがもっとも一般的である。ゆえに日本語の場合は，方言と言えば通常は場所によることばの違いを指すことになる。そして，場所による情報の現れ方が分布である。したがって，方言という言語の異なりの場所における現れが，方言の分布である。

このように分布に限らず方言を扱うのが方言学で，分布に焦点をあてて方言を研究するのが言語地理学である。したがって，言語地理学は方言学の中に含まれることになる。

(2)言語地理学と地理学

地理学は地理空間上（地表空間が基本）の事象を対象に研究する（中村・高橋 1988, pp.23-25)。ここに言う「事象」は人間にまつわることがらや自然物など特に限定されない。そう考えるなら，言語をここに含むこと（反対に言えば排除しないこと）に問題はないはずだ。方言の分布は地理空間上での言語情報の現れである。言語情報が地理学の扱う諸事象のひとつに位置付けられるのであれば，方言の分布を研究する言語地理学は地理学にも含まれることになる。

以上のように言語地理学（方言地理学）は，まさにその名が示すとおり，方言学と地理学の重なりであり，両方の側面を併せ持った学術分野であることになる。

3. 言語地理学の学術性

3.1 学術的要件をめぐって

言語地理学は，言うまでもなく学術的研究分野である。ただし，一般の言語研究とはやや色合いが異なることから，学術性に関して十分な理解が得られないことがある。やや煩瑣ではあるが，研究の性質ならびに過程を示すことで，この方面になじみが薄いと思われる特に「理論」面を重んずる言語研究家への理解を求めたい。

一般的に考えるなら，対象を設定し，それを研究しているならば，学術研究であるはずだ。したがって，方言分布を研究する限り，言語地理学は学術としての要件を満たしている。問題はどのような活動が具体的に「研究」と見なされるかである。言語地理学は方言分布を扱う。ところが，方言分布を扱った活動を実行していても，それが研究として評価されないという悲劇が起こりうる。

妙な例かもしれないが，次のようなことを想定してほしい。たとえば，日本語の「は」と「が」のことを考える人がいたとしよう。英語の不定冠詞と定冠詞（a と the）でもよい。その人は，何年にもわたって考え続けながら，答えが出せず，論文も書けなかった。この人の活動は研究なのか。聞きたくないが，厳しい答えを出す人は少なくないだろう。

言語地理学ではこのように思弁的な事態は，普通はありえない。しかし，次のようなことは，現実に多々ある。ある地域，例えば特定の川の流域を対象にして 200 地点を目標に方言分布の調査を開始した。200 という地点数そのものに大きな意味はないが，比較的狭い地域の場合，このくらいの地点数が設けられることが多い。経験的に言って，研究者が 4～5 人，あるいは大学の研究室やゼミで共同調査を行っても 1 年間に 70 地点程度が達成できる上限である。

そうすると調査だけで最低 3 年間は必要となる。この間，調査は継続される。しかし，中間段階の 1～2 年目は，すべてのデータは当然揃わない。そうなると論文や学会発表など

のアウトプットを出すことは難しいかもしれない。「しれない」と曖昧に表現したのは，途中段階で発見に出会うことも少なくないからだ。しかし，これは「運」である。運がなければ論文にならない。それではこの人や研究グループの現在の活動は研究ではないのか。

言語地理学ではほとんどの場合に調査結果を言語地図と呼ばれる地図（map），正確には地図集（atlas）にまとめる。文字ベースで，目的・仮説・結果・分析と検証・結論などから構成される「論文」とは，かなりおもむきの異なった「成果」である。「おもむき」の違いが理解できない人は，これは研究成果ではないと主張するかもしれない。それでは，言語地理学は言語地図を出しても研究ではないのか。

3.2 言語地理学の研究過程と学術性

言語地理学において上記のような調査を実施するためどのような過程が必要か。段階を追って示してみよう。

まず，事前に入念な準備を行う。ここで先のことがかなり決まってくるので，重要な段階である。内容を列挙する。

・調査対象地域の選定
・調査対象地域方言の特性の確認と問題点の把握ならびに仮説化
・調査対象地域の言語外の特性（社会・民俗など）の把握
・調査項目の設定と仮説の明確化
・調査票作成（質問文や話者に提示する絵などの準備と作成，印刷）
・地点の設定（地点選定，地点数設定）
・話者の設定（年齢・性・生育歴等の条件設定）
・準備調査とフィードバックによる最終設定

以上が決まったところで，臨地調査実施の最終準備に入る。臨地調査は，かつては「飛び込み」（アポイントメントなしにいきなり訪ねる）も行われた（発表者も若い頃は行ったし，そうすべきだという意見も当時はあった）が，社会情勢の変化にともない，しばらく前からこの方法はほとんどとられていないと思われる。

・話者紹介の依頼（主に自治体の教育委員会や社会教育関係部署などへの依頼，謝礼）
・時間調整（紹介された話者に連絡を取り，訪問日時を調整）
・調査者の調整とトレーニング（調査に参加する研究者・学生の日程調整，初心者へのチュートリアル（時には礼儀作法も）と（ヒアリング・ライティングも含む）トレーニング）
・謝礼・ノベルティの準備（協力を受けた話者への謝礼）
・移動手段の準備と確保（言語地理学の場合，話者の自宅を訪問することが多いので，自動車の準備と道順の確認）
・宿泊先の手配（グループで出向くことが多いので，合宿型になる）
・調査用機材の準備（録音機，カメラ，GPS など）

調査実施後は調査票の整備が必要である。調査現場で書き取った記録はどうしても書き落としや書き誤りがあるからだ。録音の聞き直しなどを行い，記録を整理する。また，地形図などで調査地点の場所を確認する。

後日，話者に調査時の写真を記念に同封して礼状を出すことが多い（大西はそのように

している)。むろん，あくまでも個人の気持ちの問題ではあるが，同じフィールドを別の研究者が訪ねることもあることを想定して，フィールドワークに対して悪い印象を残さないようにするという心がけでもある。

なお，まれにではあるが，約束の時間に調査者が訪れなかった（おもにアポイントメントの確認ミスや相互の勘違いに起因することが多い）とか，調査者の行動に対する不審感（地域の行動規範から外れた行為など）等によるトラブル処理が求められることもある。

整備が済んだ調査票は入力して，データベース化する。かつてはカードや紙の一覧表にすることが多かったが，今はほぼすべての研究者がコンピュータでデータ化している。このデータベースが地理学において「地理行列」と呼ばれるものに該当する（図 1)。

位置情報			言語情報	
地名	経度 （東経，単位：度）	緯度 （北緯，単位：度）	意味	語形
宮城県仙台市	140.85	38.27	動詞否定過去	ーネカッタ
富山県井波町	136.97	36.56	動詞否定過去	ーナンダ
長野県諏訪市	138.12	36.03	動詞否定過去	ーナンダ
京都府京都市	135.79	35.06	動詞否定過去	ーヘナンダ
山口県山口市	131.46	34.18	動詞否定過去	ーダッタ
高知県高知市	133.56	33.56	動詞否定過去	ーザッタ
鹿児島県頴娃町	130.46	31.30	動詞否定過去	ーンジャッタ

図 1 地理行列の例（動詞否定過去形「行かなかった」）

地理行列のみから実際の分布を把握することは相当な鍛錬を要し，普通は不可能である。そこで，このデータをもとに地図を描き，可視化することで分布を把握する。ここから得られるのが方言分布の情報である。

地図の作成は 15 年くらい前までは，多くが手作業に頼っていた。現在ではほぼすべてコンピュータで作図されるようになった。このことは，調査が済みデータベース化が完了していれば，すぐに地図が出来るような錯覚を生み出しがちである。調査結果のデータベースと地図化の間は自動的につながるわけではない。むしろこの間を繋ぐのが，言語地理学の大きな仕事である。まさに「言語」と「地理」を橋渡しするわけである（図 2)。

通常，言語（方言）の調査結果データは複雑である。これをそのまま地図にしても分布が把握できるとは限らない。もとになる複雑な言語データを特定の観点から整理することが必要である。ここで言語データに関する知識と分析技能が問われる。データさえあれば誰でも簡単に言語地図が描けるわけではない。もしそうだとしたら公開されている方言分布データを（方言学ではない一般の）地理学者がもっと使いそうなものである。実は彼らは使わないのではなく，使えないのである。それは言語に関する研究基盤を持ち合わせていないからであるが，そのことは地理学者ゆえ当然である。翻って言えば，一般の言語研究者が地理に関する知識に欠いていることに平行しているだけのことである。

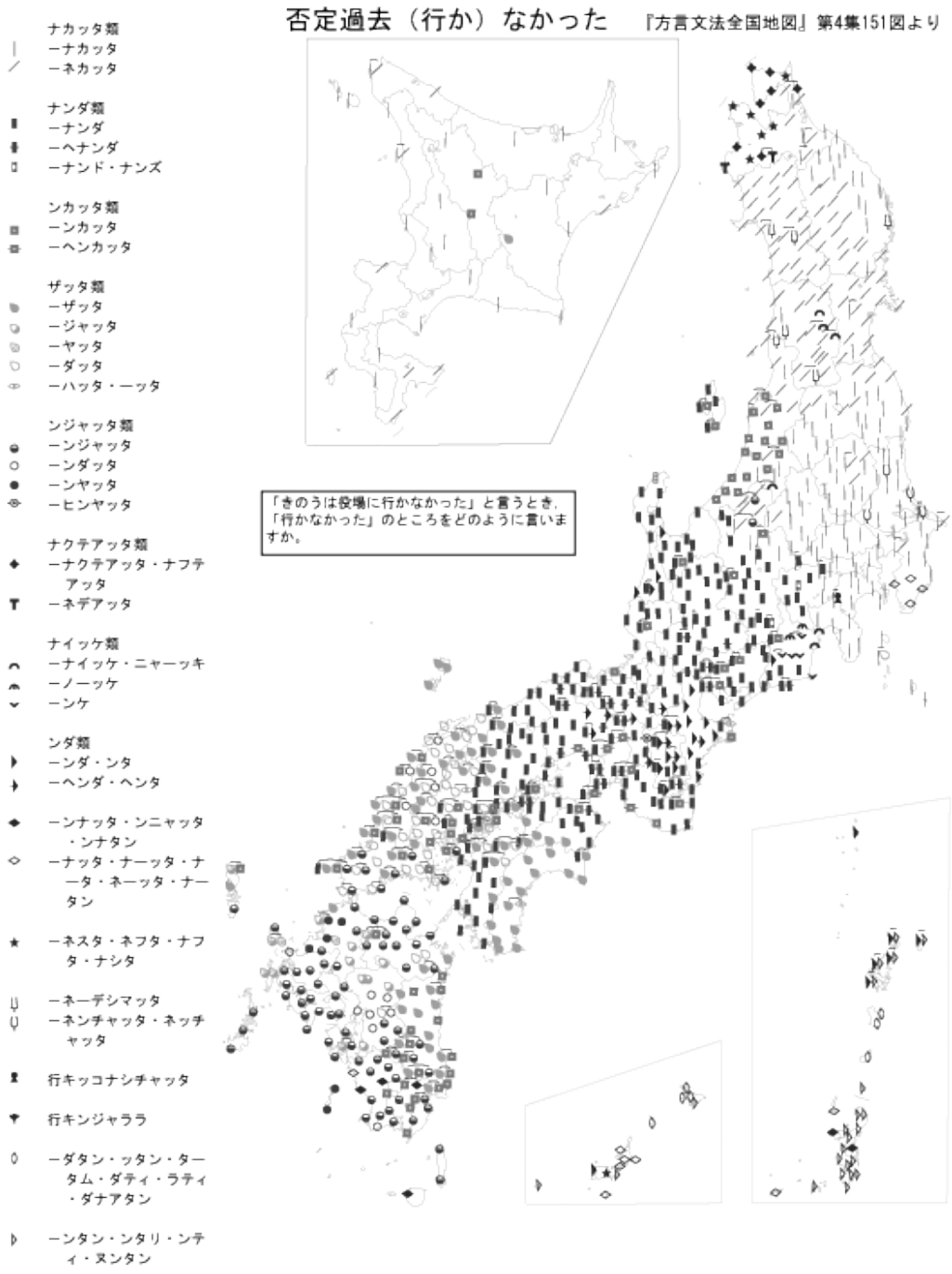

図 2 言語地図の例（動詞否定辞過去形「（行か）なかった」）

このことを別の観点からとらえなおすなら，結局は言語地図が主題図であることにつきる。かつて，言語地図が資料図と解釈図のいずれであるべきかが議論されたことがあるが（柴田 1990，小林 1990），生産的な結論が得られるべくもない。そもそも言語地図は主題図であり，地形図のような一般性・汎用性は持ち合わせていないからである。主題図である限り，作図者の何らかの意図（資料性をいくら前面に打ち出しても意図を「無」にすることはできない）に従って，見出しが整理され，その見出しに対して記号が与えられる。

言語地理学を実行している研究者なら周知のことであるが，フィールドワークで材料を集め，それを地図にして分析するこの分野は，研究ゆえに頭が必要なことは言うまでもなく，体力が必要であり，かてて加えて旅費や機材やらで，資金も必要である。このことをぜひ他分野の言語研究者に理解してほしい。論文になるまで時間がかかったり，研究成果が地図・地図集であったりしても，学問なのである。

なお，言語地図がただの一般図ではないことを主張するのが，岩田礼氏の『漢語方言解釈地図』である（岩田編 2009，2012）。わざわざ「解釈」を冠することには，重要な意味が込められている。ぜひその意図を汲んでもらいたい。

4. 言語地理学の目的

4.1 従来の考え方

1970～1980 年代は日本で言語地理学が大きな潮流であった時期である。この期を中心に約 400 冊の言語地図集と約 30,000 枚の言語地図が公表された。この数は世界トップである（Lameli et al. 2010）。この時期に言語地理学に従事した研究者，また彼らの薫陶を受けた人々に言語地理学とは何か，また言語地理学の目的を尋ねるなら，必ずや「言語史の解明」を口にするに違いない。しかしながら，このことは言語地理学の専門外，特に地理学を含む言語研究外の人にとっては非常に不思議に聞こえるらしい。

この目的意識の源流は，柴田武『言語地理学の方法』（柴田 1969）に求められる。

「言語地理学は言語史の方法の一つである。したがって，言語地理学の目的は言語の歴史を明らかにすることにある。」（柴田 1969，p.11）

「言語地理学は言語史の方法の一つである。現代の話しことばの地域的変種を材料に言語史を推定・構成する方法である。」（柴田 1969，p.27）

言語史解明の具体的手順ならびに手がかりは，柴田（1969，pp.27-57）が複数示すが，中でもよく知られ，かつその後も重視されてきたのが，「その語の地理的分布」で，その中に分類される「隣接分布の原則」と「周辺分布の原則」が基本モデルとして引き継がれてきた。

隣接分布の原則は，次のような考え方である。地点が A-B-C と連続しそこに語形が a-b-c と分布している場合，A が文化的中心地であるなら，言語変化は A で発生し順次広がるから A には新しい語形が存在する。したがって，歴史は c→b→a と求められる。

周辺分布の原則は，隣接分布の原則を前提とし，地点 A-B-C に語形 a-b-a が分布していて，B が中心地の場合，歴史は a→b とするものである。柴田（1969，p.32）も述べるとおりこの考え方は柳田（1930）の「方言周圏論」にさかのぼる。

先に述べた外部からの声は，なぜこれらがモデルとして成立するのかという素朴な疑問である。地理的連続性がそのまま歴史を反映するというのはあまりに単純で（福田 1982），これがあてはまるなら歴史学や地理学も含め人文学は広く苦労しないというものである。周辺部が一致する場合，言語の側は「言語記号の恣意性」を盾に主張するわけであるが，周辺部が相互に交流を持っていた可能性はなぜかあまり考慮されない。

言語地理学は，文献に基づく言語史と分布の照合は行ってきたものの（小林 1986），これらの疑問に真摯に向き合ってこなかった。地理学は射程範囲がきわめて広い学術分野で

あるが，地理学会が設ける専門分野の選択肢に言語地理学は挙げられていない。まともな共同研究や情報交換が行われてこなかったことのひとつの現れである。隣接分布の原則と周辺分布の原則は,ことばは悪いが言わば勝手な一人勝ち状態で鼻高々と放置されてきた。これは言語地理学にとって健全な状態ではない。未検証の仮説を基盤理論にして議論を重ねることほど危ういことはない。言語変化は地理空間の連続性に従って伝播するということの直接的検証はまだなされていない。同時に，そもそも言語地理学を言語史に縛り付けることの意味が問い直されてもよいはずだ。

4.2 言語史からの解放

方言の分布が言語外の情報の分布とどのような関係にあるのか。研究の観点としてはきわめてストレートなものでありながら，意外なほどその検討は実行されてこなかった。言語地理学を言語史の研究に位置付けてきたことがその大きな要因であることは確かであるが，それ以外に技術的・技能的な外的要因も働いていた。それは地図描画の問題である。

複数の事象を地図上で重ね合わせて照合することは，地理学の基本である。しかし，具体的にこれを実行することは想像以上に手間がかかる。標高や人口密度などの連続数値の情報を塗り分ける地図（階級区分図，コロプレスマップ）の上に方言の分布を重ね合わせることを考えてみる。数値の階級を変更することで相互の関係がより明瞭になることはしばしばある。そのためには数度の描き直しが必要である。これを紙の上で行うことは（実際,地理学では行われてきたわけであるが)相当な手間を要することは想像できるだろう。

これを一気に進展させたのが，コンピュータによる地図描画であり，地理情報システム（GIS）と呼ばれる技術である。GIS を活用することで，空間を介した方言分布と言語外事象との関係を把握することが容易になった。これは表面的には技術革新であるが，それを通して言語と言語外の情報どうしのつながりがさまざまに見えるようになってきた。方言分布を言語史に縛り付けるのではなく，言語史とは異なる観点からそれにアプローチすることでとらえられることがあることが明らかになってきたのである。これもやはり言語地理学になるはずだ。

5. 言語地理学がもたらすもの

5.1 方言区画論

日本の言語地理学は「言語地理学＝言語史の方法＝方言周圏論」という構図の下で展開してきた。同時に「方言周圏論＝柳田国男」「方言区画論＝東條操」であって，双方は方言学の目標設定において相容れないという構図が一方にあった（徳川 1990)。その結果，言語的特徴を共有する特定地域名を冠した方言（例えば，北陸方言）の空間領域の解明を研究する方言区画論は，言語地理学の対象から外されることになった。

これは,（日本の）方言学や言語地理学の文脈を知らなければ，何とも理解しづらい事態であろう。半世紀以上も前の学派対立を引きずり，自らの領域をかたくなに狭めているのである。言語地理学を言語史の拘束から解き放ち，広く地理空間と言語（方言）の関係をとらえる学術分野ととらえ直すなら，方言区画論も言語地理学の射程に収まる。

複数の地図をもとに，個別の語が示す分布を見渡していくと，比較的類似した等語線の

存在に気付くことはしばしばある[2]。伝統的考え方では，個別の語の分布は言語地理学で扱い，等語線の束は方言区画論の対象といったような切り分け，あるいは棲み分けの意識がどこかで働いていた。その結果，相互を融合させる観点の導入を阻んでしまったきらいがある。

相互の垣根を取り払うことで，個別の語の分布と方言の領域の関係を検討するなど，あたりまえの見地をあたりまえに研究の俎上にあげることができる。不要な束縛は学問の自由な発展の障害にしかならない。

5.2 学際的展開

言語地理学は，先に位置付けを検討した際にも述べたように，明らかに学際的分野である。その目的を言語史から解放するなら，その性質がよりいっそう明確になり，言語研究外の分野との有機的連携が興味深い知見を生み出すことになる。以下，いくつかの事例を示そう。

(1) 孤立分布と川の道

日本語の動詞否定辞は，西日本のンと東日本のナイで東西に分かれる。東日本にありながら甲府盆地は西日本のンが用いられ分布が孤立している（図 3）。その背景には富士川を介した沿岸部ならびに西日本と甲府盆地との繋がりがある。この交流を介して西日本の語が伝わったと考えられるが（図 4），孤立を見せるのは，河川による（生活必需品としての塩の）交易特有の形態を示すものである（大西 2008c）。

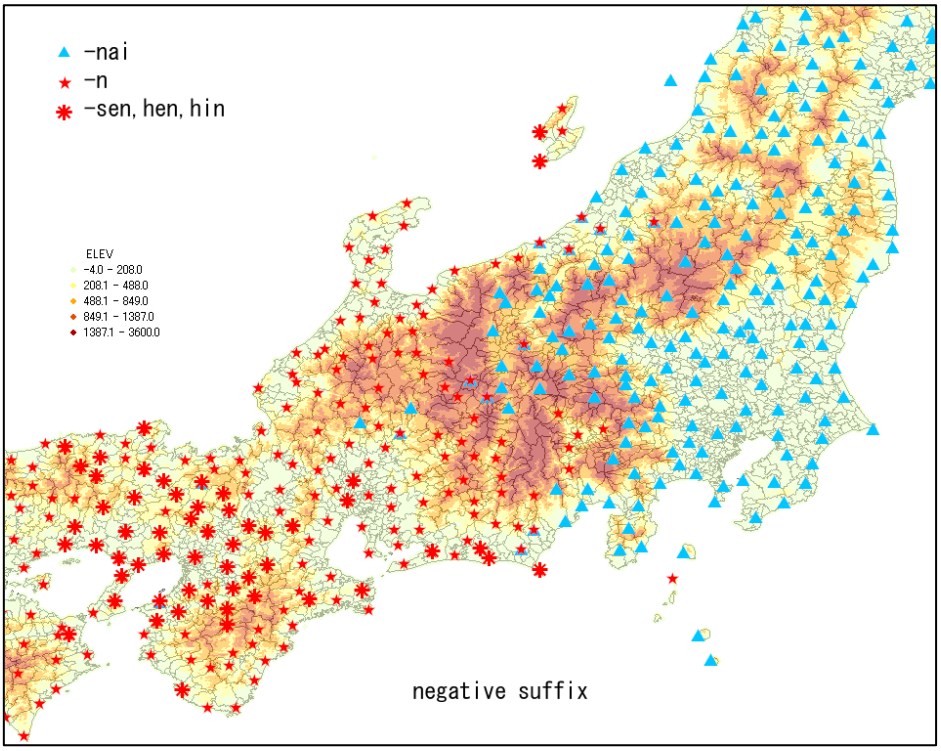

図 3 動詞否定辞の東西対立

[2] 徳川（1990，p. 193）が「方言地図から方言区画へという方向は，いまでも方言地図集を作ると，だれから教えられたわけでもないのに，かならず区画論的な見方をする者が出てくるのと比較できる。おもしろい符合ではないか。」と記すのはまさにこれに該当する。

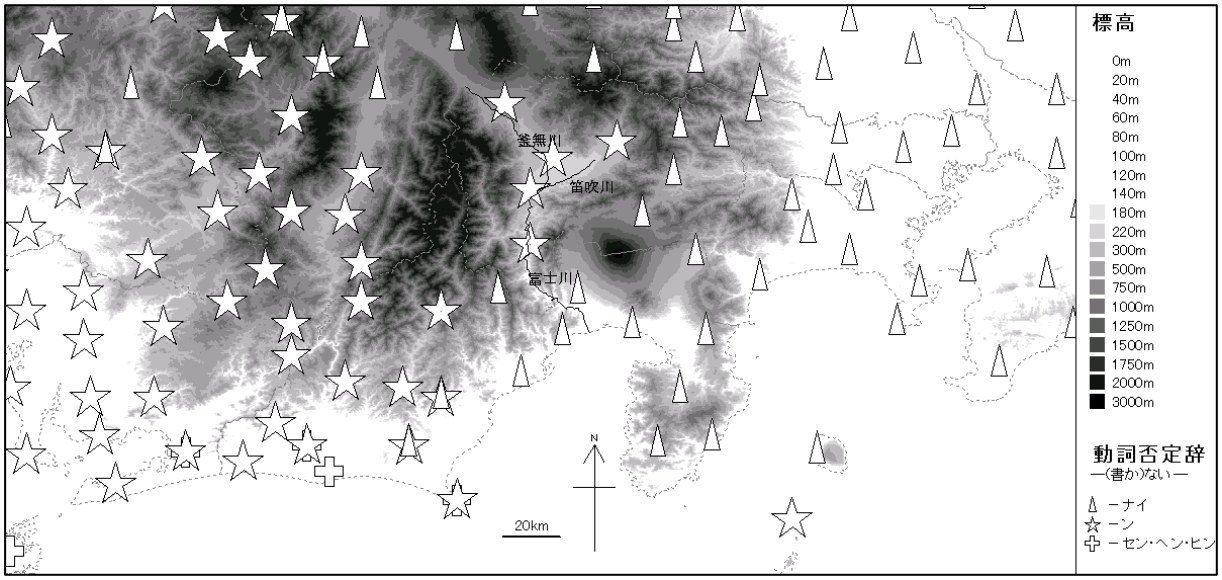

図 4 動詞否定辞の分布と富士川

(2)待遇表現と家族制度

自らの父親に対して，尊敬語を用いる地域は九州南部にまとまりながら西日本に点在する（図 5)。これを支えるのは家族制度である。世帯の人数と照合すると，父親に対する尊敬語が用いられるのは，世帯規模の小さい小家族制度の地域であることがわかる（図 6)。小家族制度では一定年齢に達すると，親世代と子世代は別家族化する。血縁はあるもののイエは別になる。このことで親であっても近所の目上の人と類似の立場になるわけである。これが待遇表現の尊敬語として顕在化したものと考えられる（大西 2008b)。

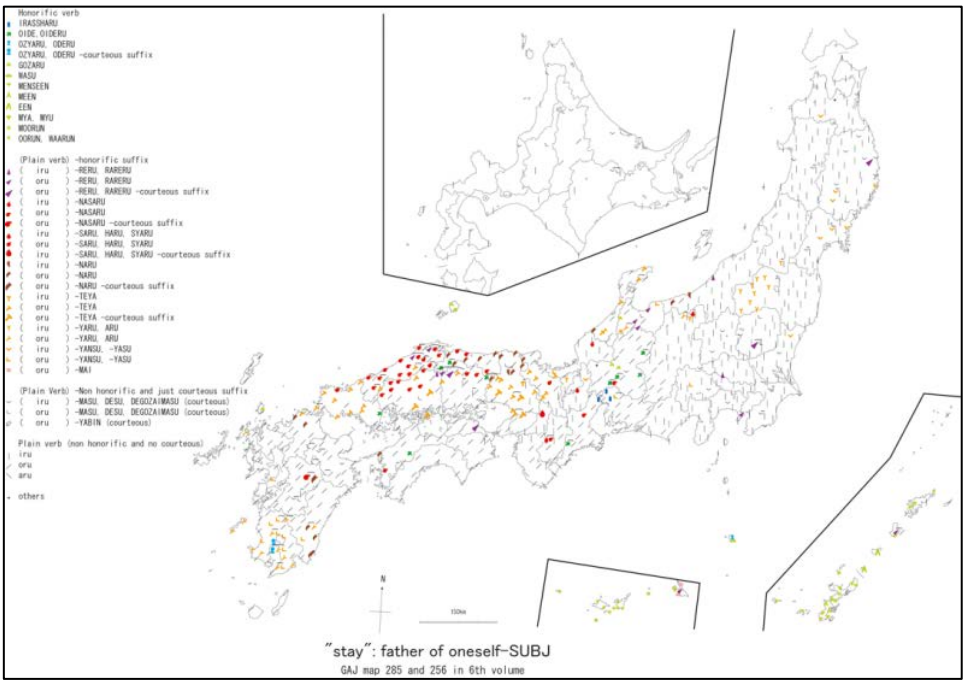

図 5 父親への対者敬語

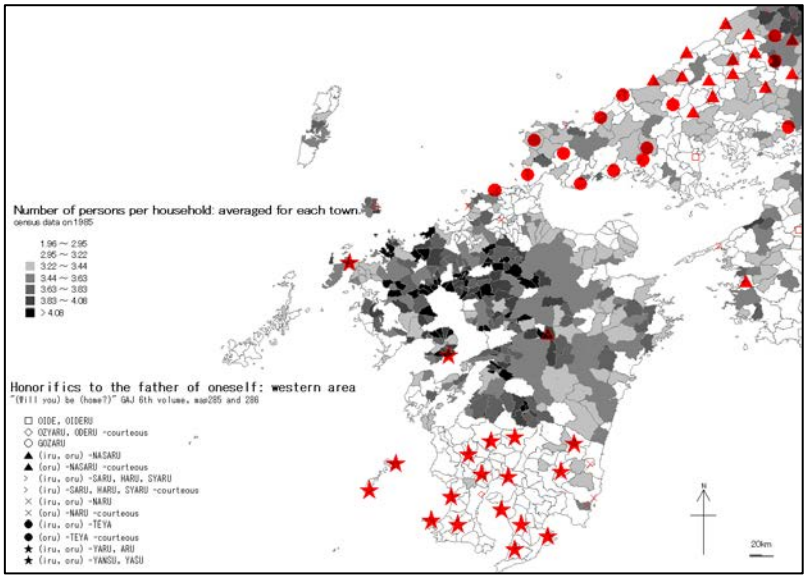

図 6 父親への対者敬語と世帯人数

(3) 拡散の異なる背景

「高かった」をタケカッタのように表すのは音韻変化ではなく，終止形の音韻変化形を他の活用形にも取り込んだもので，水準化（leveling）による変化で新たに発生した整合化形である。興味深いのは，同等の整合化形が，東北でも九州でも発生しているということである（図 7）。言語的には同じ変化が発生しているものの，東北と九州の背景には異なりがある。九州では，人口密度が中程度のところで変化が進んでいる（図 8）。このことは，新しい変化は大都市で発生するのではなく，中規模の都市で発生し，それが周囲の大小の町や村に広がることを示している。一方，東北では生産年齢人口比（15～64 歳人口の比率）が高い場所で変化が進んでいる（図 9）。つまり，町の規模ではなく，社会を支える人口の比率が高いところで新しい変化が拡大する（大西 2008a）。

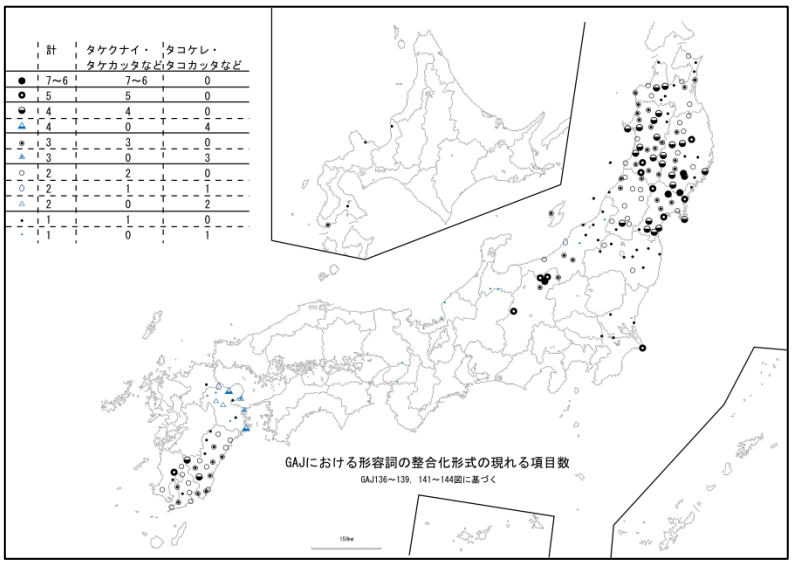

図 7 形容詞における整合化形の分布

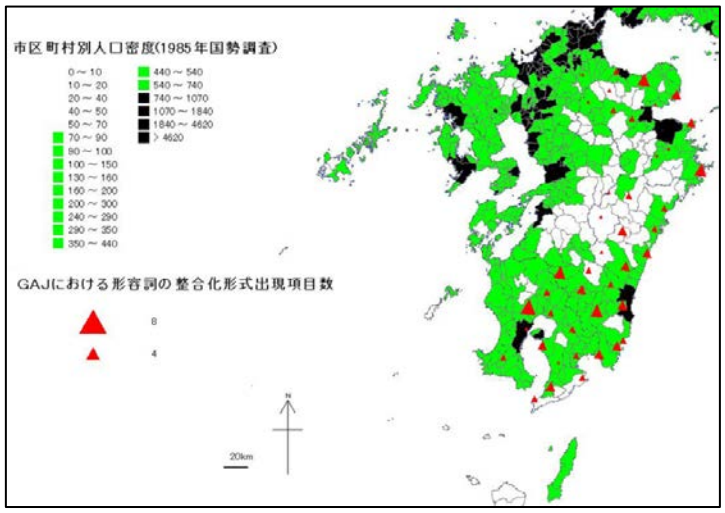

図 8 形容詞の整合化と人口データ（九州）

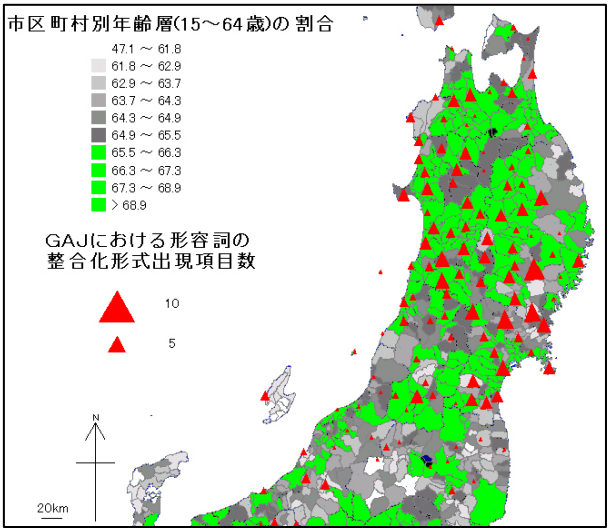

図 9 形容詞の整合化と人口データ（東北）

以上のように言語外の多様な地理情報を活用して方言分布を検討することにより，言語地理学に，言語史にとどまらない学際的観点がもたらされることが理解されるだろう。ただし，学際は結果であって，目的ではないことには注意してほしい。学際には学術分野の解放が生み出す知的喜びという大きなメリットがあるが，反対に解放そのものを目的化するとそれはそれで締め付けになる。ようやく自由を得た言語地理学に再び束縛を与えることは避けたい。

5.3 市民還元など

研究の成果やおもしろさを他分野や研究者以外に伝えたいという気持ちを持つことはないだろうか。中には伝えなければならないというある種の圧力に悩まされている人もいるかもしれない。

言語地理学は地図という視覚性を持った成果を産出する。まさに「百聞は一見にしかず」（百聞不如一見：漢書，趙充国伝）であり，長々とした弁舌より一枚の地図で成果を理解

させることができるというメリットがある。当然，このような地図は市民にも理解されやすい（反対に，他分野の言語研究者からは僻まれたりもするようだ）。このようなアピールする力を地図は持っている（実は「騙す力」も持っているから気をつけたい）。

言語地図を描き作成してきた者として正直に言うと，地図を描くことまた見せることは本人も楽しい。面白い分布が見つかったとき，（学術的意味で）美しい地図が描けたときの喜びは何物にもかえがたい。本人もハッピー，周りもハッピー，脳天気なことを言うなと鼻白まれそうだが，みんなが幸せならそれにこしたことはない。

6. むすび

言語地理学とはどのような学問であるか，抱えてきた問題点を含めて紹介し，そこを打開することで視界が大きく広がることを述べた。実際には，すでにしばらく前からブレークスルーは実行されてきているわけであるが，言語地理学自身による位置付けの更新は行われないまま放置されてきた。ここであらためて自らの学術的位置を確認したに過ぎない。

かつての柴田（1969）による目的設定は，言語地理学という新たな学問創生にあたって明瞭化を図る上で必要に迫られたという側面もあったのではないかと推測する。さかのぼれば，同じようなことが方言区画論，方言周圏論にもあったのかもしれない。しかし，いつまでもそこにこだわる必要はない。自由な発想は，健全な展開をもたらす。「目的設定」による所期の意図は達成されるとともに，ほころびも見えてきた。縫い合わせ続けることに限界があれば，軽やかに衣替えして良い頃である。

文献

岩田礼編（2009）『漢語方言解釈地図』（白帝社，東京）

岩田礼編（2012）『漢語方言解釈地図（続集）』（好文出版，東京）

大西拓一郎（2008a）「方言文法と分布」『日本語文法』8-1

大西拓一郎（2008b）『現代方言の世界』（朝倉書店，東京）

大西拓一郎（2008c）「静岡方言の文法・語彙」『方言研究の前衛』（桂書房，富山）

小林隆（1986）「文献国語史と言語地理学の対照による語史構成の方法」『国語論究 1 語彙の研究』（明治書院，東京）

小林隆（1990）「方言地図の方法について―柴田武氏「書評 国立国語研究所編『方言文法全国地図 1』」を読んで―」『国語学』163

柴田武（1969）『言語地理学の方法』（筑摩書房，東京）

柴田武（1990）「書評 国立国語研究所編『方言文法全国地図 1』」『国語学』162

徳川宗賢（1990）「言語地理学」日本方言研究会編『日本方言研究の歩み 論文編』（角川書店，東京，徳川宗賢 1993『方言地理学の展開』（ひつじ書房，東京）に再録）

中村和郎・高橋伸夫（1988）『地理学講座 1 地理学への招待』（古今書院，東京）

福田アジオ（1982）「方言周圏論と民俗学」『武蔵大人文学会雑誌』13-4

柳田国男（1930）『蝸牛考』（刀江書院，東京）

Lameli, Alfred, Ronald Kehrein and Stefan Rabanus 2010 *Language and Space: An International Handbook of Linguistic Variation: Language Mapping*（Mouton De Gruyter, Berlin）